

共生の智の探求

—文学部での人文的学びのために—

2013/9/26

哲学科・新聞学科の皆様へ
文学部哲学科教授 田中裕

共生の智の課題

- 創造性と調和の両立を目指す新しい文明の創設のための課題
- (1) 自然哲学的共生—環境倫理・新しいコスモロジー
- (2) 生命哲学的共生—生命の倫理・死生学
- (3) 社会哲学的共生—公共哲学・世代間倫理
- (4) 宗教哲学的共生—神と自然との共生
- 「共生（きょうせい＝共棲）」は生態学の用語であり、目的を自覚しない本能的なレベルの共生を主題化するだけであるので、(1)～(4)のすべてを含む哲学的な意味を明確にするために、「共生（きょうしょう）」の智とすることにする。
- 「他者と共に生きる」だけでなく、「他者のために生きる」人間のあり方を、過去を受容しつつ将来へ向けて自己形成する人間のあり方を問うキリスト教的人間学の立場から共生を考える

Eco-Sophia Symposium 2011 - 8th International Whitehead Conference -

Japan Society for Process Studies Sophia University International Process Network

Program (1.1MB)



Eco-Sophia Symposium 2011

— 8th International Whitehead Conference —

*Creativity and Harmony:
The Way of Eco-Sophia for the Future of Civilization*

Program

September 26-29, 2011

The Yotsuba Campus, Sophia University, Tokyo, Japan

Plenary Session (922KB)

Sophia University, Tokyo Japan September 26-29, 2011



**Eco-Sophia
Symposium
2011**
8th International
Whitehead Conference

— Proceedings of Eco-Sophia 2011 —
Plenary Session

Celebrating the 100th Anniversary of Sophia University

Japan Society for Process Studies

International Process Network



Parallel Session (2.6MB)

Sophia University, Tokyo Japan September 26-29, 2011



**Eco-Sophia
Symposium
2011**
8th International
Whitehead Conference

— Proceedings of Eco-Sophia 2011 —
Parallel Session

Celebrating the 100th Anniversary of Sophia University

Japan Society for Process Studies

International Process Network





講義

学部

- ⊕ 神学部
- ⊕ 文学部
- ⊕ 総合人間科学部
- ⊕ 法学部
- ⊕ 経済学部
- ⊕ 外国語学部
- ⊕ 国際教養学部
- ⊕ 理工学部
- 一般外国語教育センター
- 全学共通科目

最終講義

最終講義

HOME > 講演会 > 本学主催 講演会・シンポジウム

The Eco-Sophia Symposium 2011

Creativity and Harmony: The Way of Eco-Sophia for the Future of Civilization

Sophia University, Tokyo Japan September 26-29, 2011

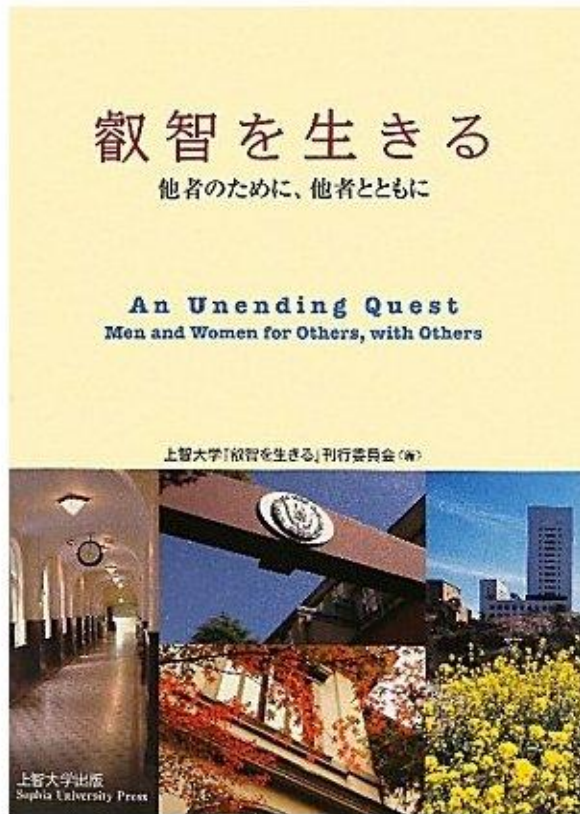


The Eco-Sophia Symposium 2011 3/40



※画像をクリックするとプログラムの詳細がご覧いただけます。

叡智を生きることと 無知の自覚



(1) 「叡智を生きる」ことが、なぜ「果てしなき探求」になるのか

(2) 「他者のために、他者とともに生きる人間」の「自己」のありかた

(3) 「一人一人の人格を大切に (cura personalis)」という理念の意味するもの

人文的学びとは？

- (1) 人（個々の人格 person）と文（ことば logos）を大切にすること。
- (2) 他者を理解することの難しさは、自己を理解することの難しさと不可分である。それゆえに、人間は一人一人の他者と共に生きることによって、日々問われている存在である。その存在の間に耳を傾けること
- (3) 過去の世代と未来の世代に対して応答可能な存在となるように生きること（責任の倫理の人文的意味）
- (4) 全体主義の超越：個体は類種的全体のためであるが、個人（person）は類種的全体を越える普遍（無限）を探求する。（レヴィナス・マリタン）

「共生」の対極にあるもの

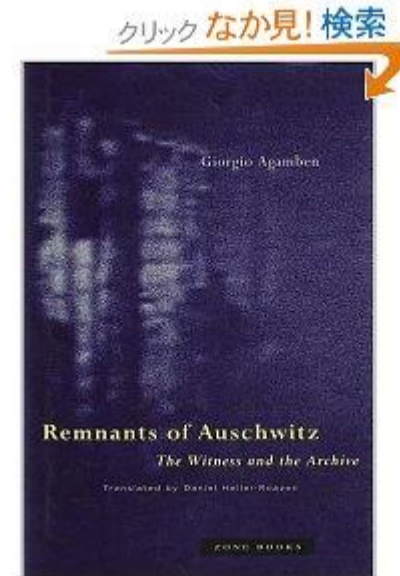
「強制収容所」の「沈黙」と「語り」

ヴィクトル・フランクル 「夜と霧」

Man's Search for Meaning

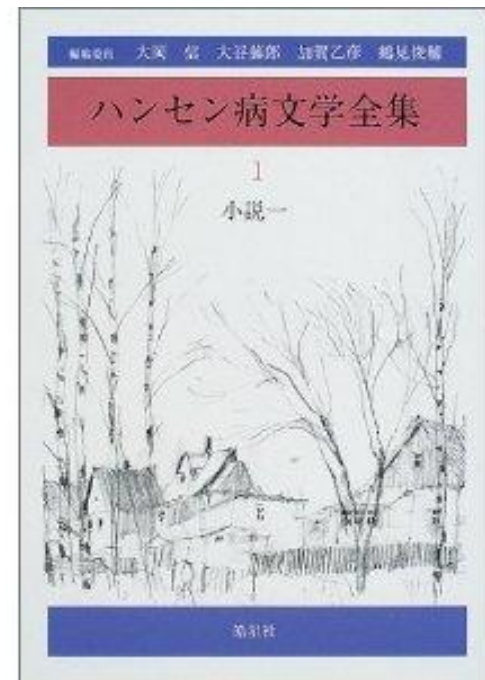
ジョルジョ・アガンベン 「アウシュビッツの残りのもの-アルシ-ヴと

証人」 Remnants of Auschwitz: The Witness and the Archive



隔離の百年から共生の明日へ

隔離の百年から共生の明日へ：ハンセン病市民学会年報2009
倶会一処：全生園患者自治会（松本馨他）篇（一光社）1979
ハンセン病文学全集：加賀乙彦他篇（皓星社）2002-2010



ヴィクトル・フランクルの根本的な問

悲劇的な人生の三要素 (the tragic triad)-

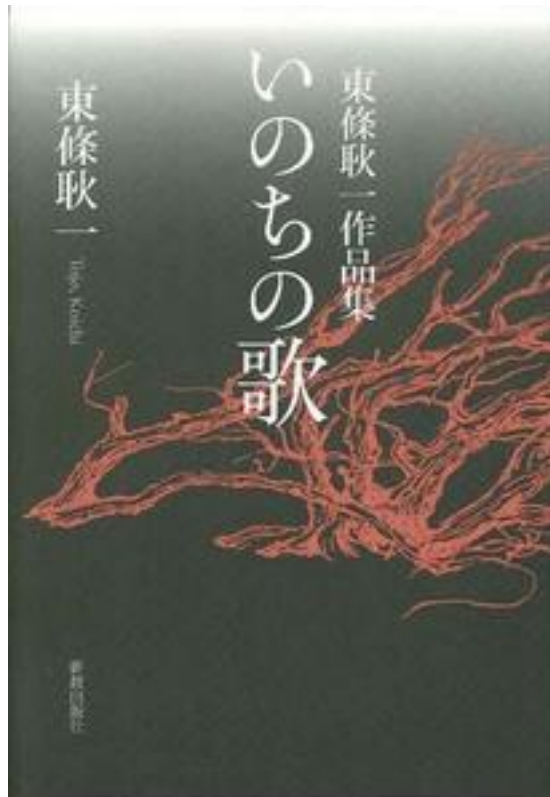
(1) 苦 (2) 罪 (3) 死- これらすべてが限界状況にまで達した場合、すべての希望が喪失した場合、それでも人は人生に「イエス」ということができるか？ —Tragic Optimism の可能根拠

ジョルジョア・アガンペンの根本的な問

悲劇的な生のアルシーブ (過去の文書) を編纂し解釈するものは、政治的・倫理的なプロパガンダによっては決して還元されぬもの、語り得ぬものに直面するが、それにもかかわらず尚、過去の人と証言を解釈し、その物語りを語り続けることによって未来に何を期待できるか。

アルシーヴの作成と解読

—個人的研究の報告—



- 東條耿一作品集の刊行
2009 (新教出版社)
- 「復生の文学—詩人東條耿一とキリスト教」 キリスト教文化研究所紀要28, 2010
- 松本馨 (全生園元自治会長) の「小さき聲」 (無教会キリスト者の個人伝道誌) の復刻
http://members2.jcom.home.ne.jp/yutaka_tanaka/matumoto/matumoto_index.htm

東條耿一のアルシーズ



- 全生園の文芸誌「山桜」所収の詩群 1934-1942
- 戦前の文芸誌 「詩人時代」「蠟人形」「文学界」「四季」への投稿誌
- 戦前のカトリック雑誌「聲」1941年度に投稿された自伝的回想
- 全生園カトリック愛徳会 「いづみ」1953年に掲載された東條耿一の遺稿「癩者の改心」
一ハンセン病図書館の資料整理・移転（ハンセン病資料館へ）の最中に発見

東條耿一の作品

- 三好達治に師事していた頃の叙情詩
- 臨終記（北條民雄の最期を看取った東條耿一の手記）
- 訪問者（未完の遺作）文芸との訣別と作品の焼却
- 癩者の父・新庭雑感・ルルドの引越・子羊日記・種まく人達・鶯の歌・柿の木・草平庵雑筆
- 病床閑日（晩年の宗教詩）
- 戦後、「いづみ」に掲載された遺稿、「癩者の改心一友への便りにかへて」

東條耿一のことば

「私は基督教的苦しみの忍従が限りなき喜びであり愛の勝利への転換であることを述べましたが、私の貧しい言がどれだけあなたの心を掴み得たかと思うと甚だ心淋しさを覚えます。私は己に苦しみを望みませんが 與えられる苦痛は神の愛として肯定し、喜んで力の限り愛したいと思えます。苦痛を愛の忍従に転嫁してヨブの如く生きたいと思えます。惜しみなく恩恵を奪われた者のみ、よく真に神の愛を感じずる事が出来るでしょう。私を癩者に選び給いし神は讃むべきかな。」



松本馨のアルシーヴ

- 「小さき声」 第一期
- 1 福音伝道の始まり： 回心の記ーこの病いは死に至らず
- [創刊号](#) 1962年9月-1969年8月まで
- 2 世俗のなかの福音： 自治会活動の開始
- [No.85](#) 1969年9月より[No.151](#) 1975年3月まで
- 3 人権のための闘い： 自治会長時代
「倶会一処」発刊の頃
- [No180](#) 1977年8月よりNo.235 1982年3月まで
- 「小さき声」 第二期
- [再刊-No.1](#) 1987年6月より 終刊-No.35 1991年4月まで

松本馨の活動

- 車椅子・盲目のハンディキャップの克服
- 無教会キリスト者として関根正雄に師事し「世俗の信仰」ないし「無信仰の信仰」のラジカルな実践
- キリスト者の立場（個人の権利）から国家を越える個人のための人権活動を展開する。
- ハンセン病図書館を創設し、患者自身の視点から、全生園の歴史を綴るアルシーヴを残す。
- 将来のハンセン病療養所をどのようにするか、独自の視点から、過去の世代（死者）への責任を負いつつ未来の世代のためにできることを考える将来への構想を語る

松本馨の言葉

- 最後に、私が少年の頃罹った病気について、らいに罹って死の前に立たされたとき、心の奥底から発した言葉「私は何の為に生まれて来たのか」の間に答えねばなりません。
- それは私自身が答えるのではなく、今日まで私を生かし、今も生かし、後も生かして下さるであろう、私たちの主イエス・キリストに答えて頂きます。
- 「この病気は死ぬほどのものでない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである」 (ヨハネ11・4)。
- 私には社会的地位も、名誉も、目的もありません。私の心の病気、私は何の為に生まれてきたのかは「神はこれらの石ころからアブラハムの子らをおこすことができる」の石になることでした。石をおこすのも、おこさないのも神です。おこすのは神の義、神のみ栄えのためであり、おこさないのも神の義、神のみ栄えのためです。私は石であることに絶望しません。主イエス・キリストご自身が、世に捨てられた隅の親石であるからです。